

## 関東支部

### 2018年関東支部総会+公開シンポジウム「世界と色とビジネス」

Report of the Kanto Branch General Assembly and the Public Symposium

中島 由貴 (関東支部幹事 / 女子美術大学大学院)

2018年4月14日(土)、東京家政学院大学千代田三番町キャンパスにおいて日本色彩学会関東支部総会が開催されました。出席37名(委任状含む)のもと、議事は滞りなく進み、全議案が承認されました。

引き続き同会場で、関東支部による公開シンポジウム「世界と色とビジネス」が開催されました。色は我々の“生”と深く結びついていますが、ビジネスをはじめとする各分野においても様々なソリューションを生み出しています。本シンポジウムでは、国内外でご活躍されている3名の先生方をお招きし、“文化”、“ビジネス”、“暮らし”の視点から色に纏わる世界の最新情報をご講演いただきました。参加者は68名と例年以上に盛況であり、活発な議論が行われたシンポジウムとなりました。以下にその概要を示します。



会場風景

#### 「中国でのカラーデザイン」

##### 大前絵理(中国名: 周 昕) 先生 (DIC カラーデザイン)

DICカラーデザインの周氏より、中国市場における色の価値と重要性が講演されました。周氏は『アジアカラートレンドブック』の編集長としてもご活躍されており、ものづくりにおけるカラーデザインのトレンド発信には、歴史・文化を含めた社会的背景、人々の価値観やライフスタイル、流行しているアート・デザインなど、その時代を表す各要素の膨大な定点観測の蓄積が必要であることを解説いただきました。さらに、中国では急速な経済発展により人々の価値観が変化あるいは多様化し、それに伴って新たなビジネスモデルが生まれていることが紹介されました。特に電子マネー決済(例えば、WeChat PayやAlipay)などインターネットを介したビジネスツールが瞬く間に普及したことや若者を中心としたネットインフルエンサーの台頭には目を見張るものがあり、中国市場におけるデジタル化の勢いを感じました。カラーデザインのトレンドを通じて、目まぐるしく変化する中国の“現在”を垣間見ることができた貴重な講演でした。

#### 「世界のカラーマネジメント」

##### 大住雅之 先生(オフィス・カラーサイエンス)

世界を相手にご活躍されているオフィス・カラーサイエンスの大住氏より、世界の産業界における色彩開発の諸状況を解説いただきました。カラーマネージングが必要となる業界においてクライアントと製造業間の距離(国)や時間(時差)に大きな隔たりがあることは珍しくなく、製品のCCM(カラーマッチング)の効率化が重要な課題であると指摘されていました。CCMの効率化には汎用的なカラーオーダーシステムおよび色差式が必要であり、これには色彩科学の知識が不可欠であるとも力説されていました。ドイツ、ルネサンス期の画家であり、科学者、実業家という顔も併せ持つアルブレヒト・デューラーを例に、産業界における色彩開発の発展には色とサイエンスの融合が重要であると示されたのが印象的でした。さらに、モルフォ蝶の羽表面の構造色に着想を得て開発された最新の顔料が紹介されました。この顔料は干渉によって青色を知覚させるという構造色の発現メカニズムを正確に再現しており、その塗装が施された高級市販車の塗料片と顔料が回覧されました。

#### 「イタリアのまちと暮らし」

##### 長谷川博士 先生 (UFFICIO COLORE)

UFFICIO COLOREの長谷川氏より、イタリア各地の景観色(主に基調色とアクセント色)の違いや特徴が

解説されました。長谷川氏は、日本ペイントで環境色彩の実務に長年携われ、退社後に色彩デザインオフィスを開設されています。現在は1年の内、10か月をイタリアで過ごされているといい、ヴェネツィア、パドバ、ポローニャ、ヴェローナ、フィレンツェ、チンクエテッレ・ブラーノ島といったイタリア各地で自ら撮影された色とりどりの美しい景観写真を基に解説していただきました。イタリア各地の基調色は、街のイメージを反映している場合やその土地の名産物（ポローニャはテラコッタが豊富に採れるため、基調色がテラコッタから成るポローニャロッソ）が用いられることが多く、アクセントカラー（鎧戸や溪流杭の色など）は基調色との調和を考えて決定されているとお話でした。街単位で景観色を統一するには、街に暮らす人々の協力なくして成立しません。ご講演の途中で長谷川氏が紹介された「イタリア人は家で暮らさず、街で暮らす」という格言の通り、イタリア人の郷土愛の強さを感じた講演でした。

### 総合討論

3名の先生によるご講演の後、総合討論の時間が設けられました。改めて“文化”，“ビジネス”，“暮らし”の視点から色を再考する場となり、また多くの参加者から幅広い内容の質問があり、極めて活発な議論の場となりました。

周氏には「中国でカラーマーケティングをする人はどのような人か」との質問があり、中国では **COLOR**, **MATERIAL**, **FINISH** を扱う **CMF** デザイナーのニーズが高く、各企業で育ってきた若い **CMF** デザイナーの層が厚くなってきていることが紹介されました。

大住氏には「世界における **CCM** の状況」について質問があり、日本の **CCM** の歴史および海外の **CCM** との違いが解説されました。海外はデジタル調色、数値でのカラーマネジメントに寛容であり、教育現場においてもカラーデザインとサイエンスの融合化がいち早く行われていることから、日本における色彩開発およびカラービジネスの課題が明らかにされました。

長谷川氏には「街、建物の色を統一する仕掛けはどのように行われているのか？」との質問があり、例としてフィレンツェには景観条例があることが紹介されました。しかし、実際には景観条例だけではなく、暮らす人々の常識や社会通念で街の景観が保たれているとのことでした。

### 交流会

大盛況のうちにシンポジウムは閉会し、その後、会場近くで交流会が開催されました。交流会には36名が参加し、シンポジウムの熱気冷めやらぬままに引き続き活発な議論と交流が行われました。



総合討論の様子1

(左から、長谷川先生、大住先生、周先生)



総合討論の様子2



総合討論の様子3